

柚木麻子著「BUTTER」および木嶋佳苗

吉田 真人

柚木麻子著「BUTTER」が英国で脚光を浴び、日本での販売部数27万部を越える40万部を記録したという。英書店最大手が昨年「今年の一冊」に選んでいる。

「主人公が女性として抱える悩みは英国でも日本でも変わらず、親友や恋人との関係を考え直すストーリーに引き付けられた。知らない日本食がたくさん出てくるのも興味深かった」と英国人の20代女性は感想を記す。英国人による英訳*なので、イギリス英語の表現が部分的に使われていることも英国での人気を後押し。また、女性たちの容姿をめぐる世評などがフェミニズム小説として読まれているという

内容は、交際した複数の男性から財産を奪い殺害した疑いで逮捕・起訴された女性を、週刊誌の女性記者が取材し、被告の独特な価値観に翻弄されながら対峙する物語だ。記者は、バター好きでグルメを自認する被告が好んだ料理を食べて、彼女の人生を追体験していく。首都圏連続不審死事件の木嶋佳苗死刑囚がモデルと示唆されている。

読んでみると、グルメ小説や官能小説的部分、またミステリー的部分もあり、楽しめる。一方、女性同士の友情と信頼や、女性の心理や肉体的感覚を描いた部分も多く、これらは理解を超える。

一昨年逝去した私の旧友の弁護士が、何回も死刑囚の木嶋と面会している。面会中の彼女の挙動（一部は活字にするに適さない）を興味深く聞いた。小説中の木嶋の印象とどう違うか、今や聞くべくもなくなってしまったのは残念だ。

木嶋は、物的証拠がないままに「死去した3名各々の最期に立ち会っていた合理的理由がある」ということで、刑法的には死刑が確定し収監されている。もし情緒法というものがあるならば、違った判決が望まれよう。即ち、死去した3名は、竜宮城の浦島太郎状態をエンジョイし、そのまま苦しむことなく（玉手箱を開けずに）睡眠状態であの世に旅立った訳で、むしろ無用の中老年の数を削減した功労者と賛美されて然るべきと考えられないだろうか？

*ポリ・バートン・イーストアングリア大学の日本文学翻訳ワークシopp卒業生

(2025年4月12日)